加清純子年譜　～「天才少女画家」とゆかりの人びと、そしてその時代～

【注】原則、月日を冒頭に数字で表示。詳細不明のものは「頃」「（時期不詳）」などとした

年次	加清純子と彼女をめぐる動き	主な事件やトピックス
一九一六	菊地又男（画家） 一一月二一日　鉄道病院料理長の父・又次郎、母・カネの六男として札幌に生まれる。画家の菊地精二は兄	
一九二〇	野見山暁治（画家） 一二月一七日　福岡県穂波町で、炭鉱経営の父野見山佐一、母キクヱの間に生まれる	六月一七日　駒ヶ岳が大爆発、三六五戸全壊
一九二九	岡村昭彦（のち報道写真家） 一月一日　海軍兵学校出身の大日本帝国海軍将校・岡村於菟彦の長男として東京帝国大学病院にて生まれる。母・順子	
一九三二	上野憲男（画家） 一一月二一日　道北の天塩町に、父・喜誉、母・春枝の三男として生まれる。三七年から上京する五二年まで札幌在住	
一九三三	荒巻義雄（作家） 四月一二日　採石業の父・芳、母・よしゐの二男として小樽市色内に生まれる。本名邦夫	二月二〇日　小林多喜二、東京築地署に検挙され、虐殺される
		三月二七日　日本が国際連盟脱退を通告
	加清純子（天才少女画家） 七月三日　教員の父・保と母・テル（厚田村出身。戸田甚一＝城聖の妹）の二女として札幌市（南一七西五）に生まれる	七月一日　三岸好太郎らが創立した北海道独立美術作家協会、札幌で第一回展を開催
	渡辺淳一（作家） 一〇月二四日　数学教師の父・鉄次郎と母・ミドリの長男として空知郡砂川町（現上砂川町）に生まれる	
一九三九	八月一三日　加清純子、母テルの父戸田甚七の一七回忌で帰札した伯父甚一を家族全員で札幌飛行場にて見送る	
一九四〇	四月　加清純子、北海道札幌師範学校付属小学校に入学	
	六月九日　加清純子、校内五十メートル走で一〇秒三で優勝	
	九月一五日　加清純子、秋季運動会八十メートル走で一五・四秒を出し優勝	
	一〇月一〇日　加清純子、第四回札幌市小学校行幸記念児童成績品展覧会に入選	
	尋常科一年の学業成績は綴方が二、三学期九五点など優秀だったが、三学期は出席日数三十四に対し病欠日数十六日と目立った	
一九四一	九月二三日　加清純子、秋季体錬大会八十メートル走で一五・五秒で優勝	
一九四二	六月七日　加清純子、春季体錬大会八十メートル走で、一四秒六で優勝	
	九月二四日　加清純子、秋季体錬大会百メートル走で一八秒〇で優勝。全校継走でも優勝	
一九四四		二月　八木義徳が「劉広福」で芥川賞を受賞
一九四五	八月一五日　加清純子、疎開先の石狩・当別から帰札。玉音放送の声が可笑しいと言い、叱られる	七月一四、一五日　北海道各地を米軍機が空襲
		八月一五日　第二次世界大戦終戦
		一〇月 五日　米兵八千人が小樽に上陸、札幌に進駐
		一一月　全道美術協会（全道展）創立
一九四六	三月一八日　加清純子、北海道第一師範学校付属国民学校初等科を卒業	
	四月　加清純子、北海道庁立札幌高等女学校に入学	四月　伊藤整、北大予科講師となる
	五月　加清保を編集・発行人とした童話雑誌「ひばり」発刊	六月　全道美術協会が札幌三越で創立展を開催
	八月　「ひばり」三号に加清純子（じゅんこ作）漫画「仲ヨクツブレタ自ドウ車」発表	一〇月　北海道美術協会（道展）は第二一回展を札幌丸井今井で開催
	九月　「ひばり」四号に加清純子が漫画「あばれボール」を発表	一二月　菊地又男を委員長に北海道アンデパンダン美術連盟が札幌三越で第一回展
一九四七	三月頃　岡村昭彦、東京医学専門学校中退	二月　ゼネラル・ストライキ中止となる
		二月　三岸節子ら一一人を発起人に女流画家協会が発足
	四月一日　学制改革により札幌高等女学校に併置中学校設置。加清純子など三年生以下は中学に編入される	五月三日　日本国憲法施行
	六月二〇日　加清純子原案、後藤ひさお絵の絵本『水中もぐり』（北日本社）刊行	九月　札幌の大丸藤井に「大丸ギャラリー」開設
		一二月　第一回日本アンデパンダン展（日本美術常会主催）が東京都美術館で開かれる
一九四八		一月二六日　帝銀事件で一二人毒殺される。八月に画家の平沢貞道が小樽で逮捕
	三月　学校の演劇コンクールで、加清純子の二年二組は「金の鵞鳥」(グリム童話)を上演し、演出賞を受賞	
	四月　中学三年生の加清純子、菊地又男の絵画指導を受け始める（＊中学二年生から指導したという記述もある）	四月　高等女学校が廃止され、新制高等学校が発足。旧高等女学校の多くが女子高等学校となる

	夏頃　加清純子、菊地又男と三泊五日の阿寒旅行。滝壺で泳ぐ。このとき雌阿寒岳を登ったとみられる。（＊菊地は純子の中学三年の夏としているが、硫黄山で菊地と並んだ写真には一九四九年とのメモがある）	六月一九日　太宰治の遺体が玉川上水で発見される。三九歳。
	九月一四～一九日　加清純子、十五歳。「ほうづきと日記」（油彩）で第二三回道展（於・札幌丸井今井）に初入選。絵には「1948　aug.31　Jyunko Kasei」のサインがある	一一月一二日　極東国際軍事裁判で判決
一九四九		二月二日　日本の「フォークダンスの父」と言われるウィンフィールド・ニブロ（GHQ北海道民事部民間教育課長）が道立札幌第一高校でスクエアダンスを教員に指導
	春　加清純子、菊地又男に連れられて春ニシン漁で賑わう苫前、増毛、留萌などの港町を写生旅行か。増毛では船に乗って海に出てニシンの水揚げ現場を取材。「鰊」「漁港」などはこの時期に描かれた	
	四月一日　加清純子、北海道立札幌女子高等学校（現・北海道立札幌北高等学校）に入学。生徒協議会委員長。美術班員として活動	四月　安部公房、シュールリアリズム的な小説「デンドロカカリヤ」を発表する
	六月二一日　第一四回サッポロ・ユネスコ賞学徒論文募集に提出した論文（作品不詳）佳作となる	
	七月頃　加清純子、道民主美術展に出品。作品不詳	
	八月　第六回独立美術協会札幌夏季講習会を受講。岡部文之助・松島正人（正幸）・居串佳一・高畠達四郎の四人連名による修了証書を受ける	七月五日　三島由紀夫が『仮面の告白』発表
	八月二四日～二八日　第一回ユネスコ学生美術展（於・札幌丸井今井）開催。加清純子の絵画「静物」が入賞する。「静物」の裏に「北海道立札幌女子高等学校　加清純子」と書かれ、併せて「congratulations and best wishes　Winfield Niblo」と祝詞が書かれたW・ニブロの名刺が保存されていた。純子の作品はアメリカに送られたというが、「静物」なのかは不詳	
	九月一四～一八日　第二回（札幌）市内高校連合美術展（於・札幌三越）。北海高校・札商高校・経済高校・道立一高・大谷高校・道立二高・北斗高校・光星学園・市立一高・道立女高・静修高校の十一高校が参加。加清純子は道立札幌女子高校一年で「雄阿寒」「顔」「湖畔」の三点を出品。上野憲男も「習作」を出品	
	一一月一三日～二〇日　加清純子、「花」（油彩）を第二四回道展（於・札幌丸井今井）に出品	
	一一月　加清純子、第二回札幌市民美術展に出品。作品不詳	
	一二月七日～一一日　　加清純子、第三回道アンデパンダン展（於・札幌三越）に「花」「裸婦」を出品。菊地又男は「純子の顔」「純子の首」を出品	
	時期不詳　加清純子、道アンデパンダン委員に推挙される	
一九五〇	一月一〇日　朝日新聞に「中央へ進出の年　少女画家加清さん」の記事掲載。「五〇年度のホープ」と期待される	二月一八日　第一回さっぽろ雪まつり開く
	三月一七日　道立札幌女子高校自治会雑誌「楡」に加清純子の創作「無筆の画家」掲載。座談会「此頃の生徒を語る」に参加。「無筆の画家」は死後刊行の「青銅文学」第四号（一九五二・三・一〇）に再掲載	
	四月九日～二六日　加清純子、第四回アンデパンダン女流画家協会展（於・東京都美術館）に油絵「リズム」「作品」を出品	四月　道立札幌医科大学設置
	四月二八日　夕刊北海タイムス一面囲み「女人百態」に「画壇のホープ　情熱と精進の加清純子さん」と紹介される	
	四月三〇日　札幌第一高校が札幌南高校と改称し、五月一日から男女共学となる。二年生に編入された渡辺淳一、荒巻義雄は道立札幌女子高校から移ってきた加清純子と二年三組同級生となる。加清純子は学級委員	五月一六日　北大でイールズ博士の講演阻止される
	五月　自由美術家協会が札幌で夏期講習会。大野五郎に「ジュン」（一九五〇）という肖像画がある	六月二五日　朝鮮戦争始まる（五三年休戦）
	八月頃　独立美術協会が札幌南高校で講習会開催か。豊平川近くで撮った記念写真に高畠達四郎のほか、参加者として加清純子、上野憲男らの顔が見える。高畠はこの時に加清純子をモデルに肖像画を描いたと思われる	
	八月八日～一六日　加清純子、第五回全道展（於・札幌丸井今井）に「夜の構図」を出品	七月八日　伊藤整訳の「チャタレイ夫人の恋人」発禁
	八月七日前後　全道展の搬入の時に、加清純子は函館の蛯子善悦と親しくなる	
	一〇月一〇日～二七日　第一四回自由美術（自由美術家協会）展（於・東京都美術館）。加清純子「少女」入選	
	一〇月二〇日　札幌南高校生徒会文学部が「感覚」創刊号刊行。加清純子、登山体験記「雌阿寒岳を登る」を発表。上野憲男も参加。文学部顧問は渡部五郎教諭。加清純子と上野憲男は渡部五郎宅を時折訪れ親交深める	
	一〇月二四日　加清純子、渡辺淳一の一七歳の誕生日を喫茶「ミレット」で祝う。菊地又男も喫茶に呼ばれていた。大通公園から渡辺淳一の家（南七西二二）まで歩く	
	一一月一日～八日　第三回札幌市民美術展（於・札幌丸井今井）がアンデパンダン形式で開かれる。加清純子「衝撃」出品	
	時期不詳（一九五一年の可能性も）　加清純子、上野憲男と札幌南高校の廊下で二人展を開催	
一九五一	一月二〇日　札幌南高校の「南高新聞」第二号に加清純子のカット掲載される。「J・KASEI」のサイン	
	一月二五日　「自由美術協会・女流作家協会所属　加清純子近作油絵個人展」が札幌・大丸新設ギャラリーで三〇日まで開催。菊地又男が案内文で「アヴァンギャルド作家」と紹介	
	二月　加清純子、札幌南高校校庭での雪像コンクール作品を領導。同級生の荒巻義雄が写真を撮る	

	三月二二日　札幌南高校二年三組クラス文芸誌「独活（うど）の芽」編集に参加。瞬子名義で詩「死せる恋人に捧ぐ」、清瀬舜子名義で小説「偽りの作」、清瀬瞬子名義で小説「平行」を発表。「偽りの作」は雪像つくり体験の内面を描いた作品。二年五組の上野憲男はクラス誌「かまきり」を刊行	
	三月二三日　渡辺淳一にラブレターを書く。原稿用紙は中央魚尾の部分に姉の「加清蘭子」の印字があった	三月一三日　詩人・小説家の原民喜、鉄道自殺。四五歳
	四月　加清純子、札幌南高校三年生となる。クラス替えで渡辺淳一は一組、純子は九組に分かれる	
	四月一日～一六日　第五回アンデパンダン女流画家協会展（於・東京都美術館）に、加清純子「ロミオとジュリエット」「チルチルとミチル」出品。東京には菊地又男が同行。菊地の兄精二宅に純子・又男同宿	
	四月一五日　上京中の加清純子、修学旅行で京都から着いた渡辺淳一と上野で密会する	
	四月一六日　加清純子の随筆「香水」が新聞（詳細不明）に掲載。（「青銅文学」第一九号＝一九五五・一二・一＝に「花の匂い」として再掲載される）	
	五月一四日　加清純子の随筆「花のいのち」が新聞（詳細不明）に掲載	
	時期不明　加清純子の随筆「あるの日の午後」が新聞（詳細不明）に掲載	
	時期不明　加清純子の随筆「印象」が新聞（詳細不明）に掲載	
	時期不明　加清純子の随筆「夜」が新聞（詳細不明）に掲載	
	七月二二日～二九日　加清純子、第六回全道展（於・札幌丸井今井）に「獨り」を出品	
	八月　自由美術家協会が札幌西高校で夏期講習会。加清純子が急遽モデルとなる（＊野見山暁治による）。大野五郎には「少女ジュン」（一九五二）という加清純子の肖像画もある	
	八月　加清純子から指南を受けて、修学旅行拒否組の図書部の伊井温彦ら四人が阿寒湖、仙北峠などをキャンプ巡りする。後日、加清純子は四人に「金魚のちぎり絵」などをプレゼント	
	秋　菊地又男、自由美術北海道展開く。定山渓で歓迎宴。参加したのは井上長三郎、大野五郎、鶴岡政男、村井正誠、峯たかし、佐田勝ら。加清純子、中央の画家に注目される	
	一〇月九日～二六日　第一五回自由美術展（於・東京都美術館）。加清純子「同類項」「無邪氣な装い」入選	九月八日　サンフランシスコ講和条約調印
	一〇月頃　野見山暁治と上野で再会	
	一〇月二〇日　「青銅文学」創刊。樫村幹夫が編集発行人。加清純子は表紙・挿画を担当。小説「一人相撲」発表	一〇月　共産党「五全協」で極左方針を掲げる。医療班を含む山村工作隊などの活動も
	一一月三〇日　「青銅文学」第二号発行。加清純子、小説「二重SEX」発表	
	一二月一六日　岡村昭彦、釧路で逮捕される	
	一二月二二日　「南高タイムス」第七号の文化短信に「青銅文学」第二号の告知	
一九五二	元日　加清純子に「狂賀新年、純子、お前は死ね」という年賀状届く	
	一月一五日　「札幌文学」で西田喜代司が「二重SEX」に触れ、「才能の濫費は無能の門」と評す	
	一月頃　加清純子、卒業後は上京するという上野憲男に「私も後から行く。その前に阿寒に寄る」と語る	
	一月一六日　加清純子、「当分札幌の土を踏みたくありません」という置き手紙を残し家を出る。所持金は七千円程度。直前に早川重章ら知人らから金を借りる。親交のあった男性の家に赤いカーネーション（アンジャベル）を置く	
	一月一七日　加清純子、釧路の刑務所で岡村昭彦と面会。一八、二一日にも。保釈金（五万円）の相談を受ける。往路は岡村春彦が同行	一月一八日　伊藤整訳「チャタレイ夫人の恋人」刊行で第一審有罪の判決を受ける
	一月二〇日　「青銅文学」第三号発行。加清純子は「時計」と題した詩を発表	一月二一日　札幌市警の白鳥一雄警部が路上で射殺される。共産党関係者に捜査及ぶ
	一月二二日　加清純子、阿寒村雄阿寒ホテルに投宿する	
	一月二三日　加清純子、「阿寒湖滝口を見に行く」と言い残して雄阿寒ホテルを出る。木材運搬トラックに乗った、煙草「光」を買った、などの証言があるが、そのまま還らず。部屋には描きかけの絵が三枚（明らかなのは二枚）あった	
	一月二八日　加清純子が志願していた北海道学芸大学で第二次進学適性検査があり、戻る期待があったが姿見せず	
	一月下旬頃　札幌南高校の担任の笹森茂が釧路、北見などを捜索するが手がかり見つからず	
	二月一〇日　札幌南高校が加清純子を家事都合（死亡）により退学措置	
	三月三日　釧路刑務所から保釈の岡村昭彦姿消す（岡村は加清準宅などを連絡先とする）	
	三月一〇日　「青銅文学」第四号発行。加清純子の失踪について「青銅文学がその背後関係であると云はれて来た」が「無関係」と宣言。加清純子の小説「無筆の画家」を掲載	
	三月　渡辺淳一、札幌南高等学校を卒業。北海道大学（理類）に合格	
	四月一四日　午前七時三〇分頃、阿寒山中・尻駒別番外地付近で黒い頭巾付きオーバー（家を出たときは赤いオーバーだったとの証言もある）に白いレインシューズ姿の若い女性の遺体発見	
	四月一六日　阿寒山中で発見された遺体は加清純子と判明。右腕に金時計が鈍く光り、二時十一分で止まっていた。岡村昭彦は六〇キロの山道を駆けつけた。岡村は腕時計は自分が渡したものだと話す	

	四月一七日　加清純子、兄準と姉蘭子、伯父、岡村昭彦らに見守られ、釧路市紫雲台で火葬される。警察は直前に検視を行い、アドルムを飲んで凍死したものと判定、厭世自殺と断定	
	四月二〇日　加清純子、札幌・薄野の新善光寺で葬送される（皆川玲子らの証言による）。父保の学校関係者を中心に、渡辺淳一ら札幌南高校職員生徒ら参列。香典帳には約百二十人の名前がある。法名は心峰妙純大姉	
	五月六日　南高新聞第九号に「カット　故加清純子」と明記されて、第二号と同じカットを再掲している	五月一日　皇居前のメーデーで流血事件
	九月二〇日「青銅文学」第五号発行。樫村の転居で編集室が札幌から東京に移る。加清純子を追悼する詩など掲載	一〇月一日　白鳥事件に関連し共産党地区幹部の村上国治容疑者逮捕
	一一月一〇日　「青銅文学」第六号発行。加清純子の遺作小説「藝術の毛皮」を掲載	一二月三一日　神戸の天才少女作家・久坂葉子が鉄道自殺。二一歳
一九五三	一月一日　「青銅文学」第七号発行。一月四日に「加清純子の思い出」を語る座談会が狸小路三丁目明治製菓階上で開催する告知掲載。谷崎眞澄らによる加清純子を追悼する詩あり。加清純子の遺作小説「藝術の毛皮（二）」掲載	
	四月一〇日　「青銅文学」第八号発行。加清純子の思い出あり。本号まで加清純子の表紙・挿画を使用	四月　菊地又男命名の「ゼロ美術同人会」が第一回展
	五月一五日　「青銅文学」第九号発行。頒価四〇円。表紙カットは「二十ケ月に亘って使用してゐた加清純子のシュールリアリズム」に代わって鶴岡弘康となる。加清純子の遺作小説「藝術の毛皮（完）」掲載	
	一二月五日　「青銅文学」第一一号発行。樫村幹夫が「『加清純子』覚え書」発表	
一九五四		
一九五五	五月一日　「青銅文学」第一六号発行。加清純子の遺作「美の抛物線」掲載	
	七月二〇日　加清蘭子詩集『北風の街』発行。「純」と題した連作詩を掲載	七月二七～二九日　共産党「六全協」開催。山村工作隊など武装路線を放棄
	一〇月一日　「青銅文学」第一八号発行。加清純子の詩「Valjeanの時計」（第三号の「時計」再編集）掲載	
	一二月一日　「青銅文学」第一九号発行。加清純子の遺作随想「花の匂い」掲載	
一九五六		八月四日　菊地又男の主導で誕生した新北海道美術協会が札幌・産業会館で第一回展
一九六二	四月～九月　脇哲「蒼ざめた青春のドキュメント」を連載、三浦栄と加清純子を中心とした人物模様を紹介	
一九六五	一月二七日　岡村昭彦『南ヴェトナム戦争従軍記』（岩波新書）刊行	三月二六日　米軍、ベトナム戦争に介入し大規模な「北爆」を開始
一九六七	一月一日　「青銅文学」第二七号で終刊。岡村春彦「群れの終末―青銅文学創刊の前後―」掲載。その活動を「アウトサイダー」「遊びを知らぬ者たちの文学」と記す	一〇月八日　ベトナム戦争に反対する学生らが羽田空港周辺で首相外遊阻止闘争
一九七一	四月二一日　渡辺淳一、札幌で岡村昭彦と会い「阿寒に果つ」の取材をする	
	七月　渡辺淳一「阿寒に果つ」の雑誌連載開始（加清純子がモデルのヒロインを「時任純子」とする）	
	八月一日　月刊「さっぽろ」に「小説『阿寒に果つ』で甦える故加清純子」（無署名だが筆者は脇哲）掲載	
一九七二	一二月　荒巻義雄『白き日旅立てば不死』刊行（加清純子がモデルの「加能純子」登場）	二月三日～一三日　札幌で冬季オリンピック開催
		二月一九日～二八日　連合赤軍、「あさま山荘」で籠城
		五月一五日　沖縄が日本に復帰
一九七三	一一月　渡辺淳一『阿寒に果つ』刊行	九月七日　長沼ナイキ訴訟で自衛隊違憲判決
一九七五	この頃　菊地又男がコラージュ（通称「レクイエム　J・K」）制作（加清純子がモデル）	四月三〇日　ベトナム戦争終結
	六月二一日　「阿寒に果つ」映画化。五十嵐じゅん（時任純子役）、三浦友和（田辺俊一役）が主演	
一九七八	三月二日　父加清保死去。七七歳	
一九八二	四月一七日　母加清テル死去。七八歳	
一九八五	三月二四日　岡村昭彦死去。五六歳	
一九九〇	六月二五日　純子の兄・加清準が「走れ！メロス」（「時事ジャーナル」）発表	
一九九五	四月一四日　日野原冬子（加清蘭子）編『わがいのち「阿寒に果つ」とも―遺作画集』刊行。渡辺淳一、菊地又男が寄稿	
二〇〇一	七月一日　菊地又男死去。八四歳	
二〇一二	二月一三日　加清蘭子死去。八三歳	
二〇一四	四月三〇日　渡辺淳一死去。八〇歳	
	一〇月二〇日　野見山暁治が随想集『とこしえのお嬢さん』を出版。加清純子を「還ってこなかった妖精」と懐旧	
二〇一六	七月二五日　暮尾淳（加清鍾）、『暮尾淳詩集』に加清純子追想の「天才少女画家抄」収載	
二〇一七	四月二二日　道立文学館で特別展「ふみくらの奥をのぞけば」開催。五月六日、同展文学ライブ「レクイエムJ・K　六五年後の『阿寒に果つ』」開催。荒巻義雄、暮尾淳が対談	
二〇一八	三月一八日　司修「少女ジュン」（日本経済新聞文化面）。大野五郎（一九一〇～二〇〇六）描く加清純子の絵に触れる	
二〇一九	四月一三日　北海道立文学館で特別展「よみがえれ！　とこしえの加清純子～『阿寒に果つ』ヒロインの未完の青春」開催。加清純子の遺作絵画を初展示。暮尾淳が姉・純子の思い出を講演で語る	
二〇二〇	一月一一日　暮尾淳死去。八〇歳	
二〇二一	六月一八日　上野憲男死去。八八歳	

二〇二二	一月二二日　北海道立文学館で特別展「『よみがえれ！とこしえの加清純子』再び」開催	

（谷口孝男、苫名直子　編）

＊加清純子に関する資料はまだ整理されておらず、事項については記憶に基づくため、当事者が異なる内容を記している場合も多い。本年譜も曖昧さを残したベータ版にとどまっている。なお、参照資料は①美術関係の公募展、団体展、個展等は当該展目録②学校関係は当該校資料③加清純子全般については朝日新聞北海道版、北海道新聞、北海タイムスなどの新聞記事④文業については「ひばり」「青銅文学」各号ほか一などである。荒巻義雄、加清鍾（暮尾淳）、加清準、加清蘭子（日野原冬子）、菊地又男、鶴田玲子、野見山暁治、脇哲、渡辺淳一など各氏の追想文、長瀬啓介氏の研究も参考にした。伊井温彦、加清桂子、串間栄子、青娥書房（関根文範）、高澤光雄、中谷（辻）慧子、渡辺淳一文学館各位には資料提供とご教示をいただいた。歴史的事項についてはインターネット百科事典wikipediaも参照している。（谷口記）